

小さな町の豊かさに学ぶ～イタリアのスローシティ・美しい村連合の試み～

島村菜津さん（作家／スローフード協会世話人）

1985年からイタリアに通い出したという島村さんに、イタリアの最新事情と、スローフード発祥の国・地域が有する、「理念」と実践を、スライドを交えてお話しいただいた。公表前の情報ということもあって、本抄録では、極力差し障りのない範囲にとどめておく。講義に当たり、島村さんは「いま起こっている、世界的な経済危機は、スローフード人間には関係ない」と明言された。長年の伝統・蓄積に支えられた地域の、暮らしの確かさ、小さな町ゆえの豊かさを披露していただいた。

### 大きすぎない、人間サイズの町

1995年頃、イタリアでスローシティを言い出す人が出た。スローシティの1つ、オルヴィエートは人間サイズの生活が豊か、大きすぎない町のネットワークをつくりたいとした。大きすぎない町とは5万人以下、5万人以上は無理だという。

スローシティを唱える一人が、グレーベ・インキアンティ。フィレンツェから1時間以内の町に住む彼は、「郊外に成り下がらない町」を唱えた。

1950年代～80年代初頭、イタリアで行政的過疎が進展した。都市化、工業化に人口が吸い取られ、2000人の若者のうち、6人しか残らない村がざらにあった。

島村さんがイタリアへ通い出した1985年ころのトスカーナもその例に漏れなかった。それが、いまでは日本人女性憧れの町となり、猫も杓子も行くようになったのは90年代から。

当時、過疎化する町で、パオロ・サトルニーニ市長が、農業を継ぐつもりがなかったおじいさんと2人で暇つぶしできるのは、県道を走る車の数を数えることだった。というのも、ほとんど1日待っても車は来ず、昼寝してしまうという状態だった。それがいま、信じられない状態となった。

しかし、来すぎない程度に人が来て、大型ショッピングセンターも建てず、大きくなりすぎない町づくりをやっている。

パオロさんは、シネコン、大型スーパー、大型ホテルは私の町では全く必要ないという。これらが入ってこないために、町の人々の意識をどう変えたかが、鍵だ。それは交流を活かすこと、深い交流ができる場で、こじんまりした、テーマがはっきりした映画祭をする。

ワイナリーで音楽祭をやる。音楽祭はチャリティコンサート、ジュリアーニ音楽院の学長をした人が、イタリアで世話になったと財団をつくって、2週間学生をトスカーナでイタリア語を浴びる生活をさせたいが、音楽院だけでは客を呼べない。ということでチャリティコンサートになった。村に滞在させる代わりに、ジュリアーニ音楽院のコンサートをして帰って行く。

中世づくりの町で

町には門があり、夜は閉まる。広場—デモ、演説、処刑がなされた—は、市民のコンセンサスを取る場所である。敵が侵入してきたときに押さえ込むように、道はまっすぐではなく、曲がりくねって造られている。

この町で、いまでも続く風習は、夜のそぞろ歩き。これがウィンドウショッピングの習慣になる。地元の人が地元の店を利用する習慣が、いまでもある。

ポリスの伝統。大きくならないように、人間サイズの町を育ててきた。

### ヨソ者の流入がダイナミズムを生む

まったく町に関係ない人が住み始めたとき、町が変わり始めた。若い人が入ってくる。先生や医者のカップルが新規就農し始めた。これによって、地元の意識が変わる。

自分たちの町のほうが、フィレンツェより豊か、という自信が持てる。

哲学者でもあるマッシュモ・カッチャリ・ベネチア市長は、ギリシャのポリスと、古代ローマの町は、大きく違いがあるという。

ギリシャは宗教が違ふとその町に入れぬ。古代ローマは他民族、多言語、多宗教であり、これが、古代ローマの面白いダイナミズムを生んだ。

異質が入る。外からヨソ者が入ることで、ダイナミズムが生まれる。

モナリザの絵のバック風景のモデルになった町として知られる地域を、1万8000軒くらいの民宿も含めて、ファッション・ブランドとして知られるフェラガモが村ごと買い取った。儲けた金を農業観光に投資するというこゝで。

息子2人、母の代は6人兄弟中5人が貴族と結婚した。靴、バッグ、ファッションがどれだけ産業として持続するか。もっと、食や自然をおさえるということで、700€を環境保全型として、景色をフェラガモがすべてつくっちゃうということをした。

そのフェラガモに、村を買い取って再建してくれるのはいいが、村に魂を入れて欲しい、職人を入れなければ、という要求をした。対してフェラガモは、町に職人を入れた。

グレーベン・キアンティは、劇的に過疎化した。それが、70年代後半にヨソ者が入り、店もでき、老舗もがんばり、町の人口が回復した。

三角形の広場が有名な町で、湿気が高く、人が住むところじゃないと言われていた。市場で潤い、馬がいたところに人が住んだ。個人店を大切にし、地元農家の作物をとってもらうホテルのオーナーと親交を深めたり、肉屋とレストランのシェフが一緒だったりする。また、ダンテの神曲をそらんじる、有名な肉屋がいる。

ドイツ人が十数人で買い取った集落＝アツチェラーノでは、ヨソ者（であるドイツ人）が15年くらいかけて修理して、町を再生してしまった。15年間ドイツから通ってきても、

イタリア語を覚えない人たちによって。

ブドウの間に果実、うしろに森で豚を飼う。伝統的なヨーロッパの家族農業のあり方を踏襲して。この集落をパオロは「マローシティ」と言いだし、「オルヴィエート・スローシティ」宣言をした。

イタリアの地域おこしのキーワードの一つに、オーガニック＝**BIO**（ビオ）がある。

有機農家の一人が、70年代後半に、廃棄された修道院を買い取って、有機農業をやった。

「神がつくった見事な自然に、人間が手を加えると、見事になると思っていたが、なんと浅はかな」と。異質なものに結びついて、新しい発想に結びつく。

イタリア農業は、ワインの畑の間に影をつくる。半分森を残す。薪をとって、豚を育てて・・・、というのが元々の農家の形である。昔を再現しているオーガニックレストランでは、1000人の農家があり、オーガニックのビールが出る。

価値転換の象徴「トゥルッリ」

トゥルッリは、石を積み上げただけの家で、貧しさの象徴とされてきた。動物も家族も一緒に住んでいた家で、「みじめだ」と言っていた。

その家々が、世界遺産となって、石一つ動かすにも許可が要る。いまや豊かさ象徴となった。トゥルッリ巡りが観光になり、1泊1万8000円くらいもする。

「イタリアの美しい集落連合」は、スローシティから生まれた。

人口1万5千人くらいの小さい町にもう一つの美しい集落連合は、集落くらいの規模だと、美しいのが保てる。

「LOCOROTNDO」の看板があると、車が乗り入れられない。自分たちの暮らす美しい集落に、観光の車を入れないで、そぞろ歩きし、立ち話しをしてほしい。「歩いて楽しむ町」を、車社会の一方で、守ってきた。

オルヴィエートは洞窟の町である。2千台くらい入る地下駐車場をつくった。景色を壊したくないということで、オープンエアの駐車場にせず、観光客がどんどん入ってくると、歩いて楽しい町でなくなってしまうところから、発想を変えて、駐車場がつくられた。

パルーセは、エネルギーを200%自給している。人口2000人の町で、風力発電が4基、放牧の牛がたくさんいる。町は800人が住み、地元農協が肉とチーズを売っている、BSA問題で肉に不信感が募ったとき、わざわざこの町へ買いに来た人が少なくなかった。

景観一歩いて、眺め直してみる

オルヴィエートは、1200人の町に80人の医者がいる大規模な病院がある。その病院には、周りの山間部の人々がやってくる。医療が充実しているので、若いカップルが住める。

教育も整い、大学まである。長距離バスが充実しており、ほとんどの人が通える。教育の中でも文化を大切に、音楽祭ではめっちゃめっちゃ上手な、地元のブラスバンドがある。映画祭に力を入れ、質の高い映画のみ上映している。また、1200人の町でスポーツが盛んで、スタジアムが4つあり、ボランティアが支えている。

景観で06年のスローシティ賞を受賞したが、そんなに立派な建物はない。

70年代に流行ったコンクリート打ちっ放しが嫌で、市長はこれを壊すのが夢だった。10年くらい前に養鶏場ができたが、資金が行き詰まり倒産した。これが廃墟みたいになり、04年か05年頃に町が買い取り、ダイナマイトで壊す日を祭りにした。祭りでは、宝くじで当たった人を「エコモンスター」として、ダイナマイトのスイッチを押す役目にするということまで演出して、金もかけずに祭りにした、一というのが受賞の理由だった。

人が増えず減りもせず。スーパーがやってくることに對して、地元の法律をつくり、町中には大きな建物は建てられなくなった。1200人の町に250軒の店があるが、すべて個人の店。アオエニー山脈のトレッキングの入り口で、観光客は夏だけ、ほかは外からほとんど人が入ってこない。

町の人には、余計なものはつukらない。自分たちの町は自分たちで支える意識が強い。

移民が入ってきてもありがたいことに、ウクライナ人が介護分野をやってくれる。外から来た人が住みやすい町。町づくりに異質なものを、外からの視線を取り込む。それが、町づくりのエネルギーになることを自覚している。

## 結びに

歩いてみる。自分が住む、住み続けられるどうか、歩いて眺め直したとき、足が不自由でも、子どもが自転車に乗って走ってもだいじょうぶか、などがわかる。

スローなペースで自分の側を眺め直してみても、なにかできることをみんなでやってみる。すると、車社会に傾きすぎたかなとも思う。

地元の物づくりを生かす。個人の店が並ぶ市場を守りきれるか。90年代に大規模小売店舗法（大店法）ができて、個人の店はなぎ倒された。

意識の高い個人店を守る。地産地消をみんなで守る。意識を変えていく。

半農半カフェのような、新しい交流拠点が、若い人を捉えていく。自分の欲しい情報が、欲しいだけ入るコミュニケーションが大事。

(文責・伊藤)